

NPO 法人 スーダン障害者教育支援の会
(CAPEDS)

2008 年度
Ibsar プロジェクト活動報告書

2008 年 10 月

目次

I. CAPEDS

1. CAPEDS の活動理念・活動目的
2. CAPEDS の経歴

II. スーダンの視覚障害者の現状

1. スーダンの視覚障害者教育の現状
2. 大学での教育について

III. 第三章 Ibsar プロジェクト

1. Ibsar プロジェクトの目的
2. Ibsar プロジェクトの長期的目標

IV. Ibsar プロジェクトの現地報告

1. プロジェクト全体からみた今回の活動の位置づけ
2. 事前調査
3. 活動内容
4. 事後調査

V. 会計報告

VI. 今後の課題

1. 事務面での課題
2. 組織面での課題
3. 下澤嶽様・坂田喜子様からのメッセージ
4. 総括

はじめに

この CAPEDS の活動に私が関わり始めたのは 2008 年 5 月であり、「Ibsar プロジェクトを報告書にまとめよう」という計画が立ち上がったのは 8 月末であった。報告書の章立てや執筆者の割り当てを考えている段階では未だに CAPEDS の活動の歴史、スーダンの現状などの知識が圧倒的に不足しており、私自身が CAPEDS、Ibsar プロジェクトを学びながら、そして周囲の力を借りながら今まで作業を続けてきた。

この報告書は、私と同じように CAPEDS に参加している日本人スタッフと、祖国の障害者を想い CAPEDS をここまで作り上げてきたスーダン人たち双方が「CAPEDS とは何なのか」「自分たちは何を目指しているのか」を根本から見つめ作成した物である。この報告書が、単にプロジェクトの結果をまとめた物ではなく、CAPEDS のメンバー、スーダンの障害者のこれまでの軌跡の一片として受け取られ、CAPEDS の想いを理解し、納得する為のきっかけになれば、執筆・編纂した者にとってそれ以上のことはないと思っている。

最後に、コメントの執筆を快く引き受けてくださった NPO 法人国際協力センター JANIC 事務局長の下澤嶽様、坂田様、そしてこの報告書に目を通してすべての人に感謝の意を表させて頂き、編纂担当の総括とする。

CAPEDS Ibsar プロジェクト報告書編纂担当

中山 美有紀

I. CAPEDS

【活動の理念】スーダン障害者の社会への完全な参加と、教育・就労・余暇など全ての面での平等な社会生活の実現を目指しています

《 活動の四本柱 》

- ◇ 基礎教育支援 ex) 点字盤提供
 - ◇ 情報教育支援 ex) 音声読み上げソフト提供
 - ◇ 内発的取り組み促進 ex) スーダン現地事務所設立
 - ◇ 障害者スポーツ促進 ex) ブラインドサッカーボール提供
- 国内ではこれらのために資金の獲得や広報活動などを行っています。

1. CAPEDS の活動理念・活動目的

CAPEDS の活動理念・目的を説明する。CAPEDS の活動目的は、スーダンにおいて、障害者が社会に完全に参加し、教育・就労・余暇などすべての面で、平等な生活を実現することである。そのための戦略として、基礎教育の支援、情報教育の支援、内発的取り組みの促進、障害者スポーツの普及の4つを柱として活動している。

① 基礎教育の支援

障害を持つ子供たちは、障害を持たない子供たちに比べ読み書き・計算等の基礎的な教育を満足に受けられない割合が多い。

そこで私たちは、障害を持つ子供たちが地域のほかの子供たちと同じように学び、基礎的な教育を受けられるような支援を展開していく。

② 情報教育の支援

現代社会において、必要な情報にアクセスできることは、社会に参加するために重要な役割を果たす。そのため、高等教育機関における障害者の情報教育を充実させ、高等教育への参加を促進しつつ、就労に必要なスキルを向上できるような支援を展開していくことは、教育の機会保障を越えて、障害者が完全に社会へ参加するためには不可欠である。

③ 内発的取り組みの促進

支援を持続的なものにするには、外部から一方的に支援を押し付けるのではなく、内部の主体が積極的に行動することが重要である。

CAPEDS は、障害者の教育を外国からの援助に頼るばかりではなく、スーダン国内の教育機関を含めた公的機関が、障害者教育支援を内発的に行うことができるよう、自立に向けた支援を行う。

現在はスーダンのハルツーム大学障害学生卒業生の会との協力などにより自立した活動に向けた支援を行っている。

④ 障害者スポーツの普及

スポーツを通して障害者がコミュニティーに参加し、本人を含めた地域住民の生活に刺激を与えることで障害者がより高い生活の質や自尊心を獲得できるように、運動の環境を整備し、障害者スポーツの普及を目指す。

現在普及に取り組んでいるのは、鈴の入ったサッカーボールを使ったブラインドサッカーというスポーツである。



点字盤を使う様子



ブラインドサッカーの様子

2. CAPEDS の経歴

ここでは、CAPEDS が設立された経緯、NPO 法人となる前の活動も含めた活動経歴について説明する。

CAPEDS は、代表理事モハメド・アブディンの祖国の障害者が勉強しやすい環境を作りたいという思いから始まった。日本へ留学していたアブディンは、視覚障害者でも勉強ができる日本の環境を母国スーダンでも実現できないかと考え、他のスーダン人留学生と一緒に、点字板の贈与から祖国への支援を始めた。同じスーダンからの視覚障害留学生や日

本人の賛同者と共に、学園祭などで資金を集め点字盤 300 枚をハルツーム州教育省に寄贈するなど成果を収めた。しかし同時に個人による支援では、その規模や質に限界があることも痛感した。そのため、より組織的にスーダンの障害者を支援していくための団体として、2007 年 3 月、スーダン障害者教育支援の会（CAPEDS）設立に踏み切ったのである。

CAPEDS は設立以降アブディンの在学している東京外国語大学、そして筑波大学を中心に活動を拡大し、支援プロジェクトの立案や企業からの資金獲得、国内での活動広報など幅広い活動を行っていった。2008 年 3 月には NPO 法人格を取得し、会員獲得や数々のイベントへの参加などさらに活動を進めていった。今夏のスーダンプロジェクトはこれまでの日本での活動が実を結んだものと位置づけられる。また、団体発足後 1 年と半年という短期間で現地プロジェクトを実行できたことは大きな成果と言えるだろう。今後も CAPEDS は、本プロジェクトを中心にスーダンの障害者の完全な社会参加に向けた活動を続けていく予定である。

《 CAPEDS のこれまでの活動 》

○ 2004 年

アブディンが所属するブラインドサッカーチームの優勝を記念して贈られたサッカーボール 1 個を寄贈

○ 2005 年 8 月

スーダン盲人連合スポーツ部に、視覚障害者サッカーボール 2 個を寄贈

筑波大学やどかり祭に出店し、その売り上げでハルツーム州教育省に点字盤 300 台を寄贈

○ 2006 年 12 月

ハルツーム州の視覚障害児教育支援校に、点字板 25 台を寄贈

○ 2007 年 3 月

スーダン障害者教育支援の会（CAPEDS）結成

○ 2007 年 7 月

ハルツーム大学障害者卒業生の会、ハルツーム州障害児中核支援校の教諭たちとの懇談会を開催し、CAPEDS の活動の可能性を調査

○ 2008 年 3 月：NPO 法人格取得

○ 2008 年 7 月

Ibsar プロジェクト開始。第 1 ステップとして、ハルツーム大学に障害学生支援室を設置

II. スーダンの視覚障害者の現状

<スーダン概況>

面積	250 km ² (アフリカ最大)
人口	3,623 万人 (2005 年)
民族分布	アラブ系 40%、アフリカ系 31%、 その他
宗教分布	イスラム教 (主に北部)、キリスト教 (主に南部)、土着宗教 597 の民族グループ、100 以上の言 語と方言が使用されている
中心産業	石油産業、農業



<主要開発指数>

平均寿命	51.4
一人当たり GDP (US\$)	2.083
5 歳未満児栄養失調率 (%)	41 (1996-2005)
成人 (15 歳以上) 識字率 (%)	60.9 (1995-2005)
乳児死亡率 (出生 1000 件あたり)	62
5 歳未満児死亡率 (同上)	90
妊婦死亡率 (出生 10 万件あたり)	450
成人 (15-49 歳) のエイズ感染率 (%)	1.6
結核患者数 (10 万人あたり)	400
マラリア患者数 (10 万人あたり)	13,934 (2000 年)

☆ スーダンにおける障害者の現状

- ・ 障害者数 : 30 万人 / 人口 3000 万人 (1993 年の国勢調査)
 - ・ 紛争の激しい南部 10 州は調査対象外
 - ・ 未だに次回国勢調査の予定はない
 - ・ WHO の障害者数推計 : 300 万人 (全人口の 10%)
- 障害者が定職に就くことは非常に難しく、物乞いをする者も多い

<スーダンにおける視覚障害者の教育の現状>

【視覚障害の困難】移動の障害+情報の障害

☆ 視覚障害者の学習方法

点字盤、点字資料の利用
朗読・録音テープの利用
パソコン音声読み上げソフトの利用



↑ 点字の利用
パソコンの利用→

【盲学校における問題】

- ・ 入学者数の少なさ
- ・ 通学の不便
- ・ 教材の不足・・・等

【通常学校における問題】

- ・ 支援体制の未整備
- ・ 学校と教員の理解不足
- ・ 点字の未普及・・・等

【高等教育機関における問題】

- ・ 支援体制の未整備
- ・ 学校と教員の理解不足
- ・ 情報利用の限界・・・等

<2007年スーダン現地調査の様子>



↑ 活用されずに積み上げられた点字資料



↑ ほこりをかぶったオーディオ機器

音声読み上げソフトが搭載されているにもかかわらず、
長年使われていないコンピュータ



1. 基礎教育

<視覚障害者教育の概要と盲学校における困難>

1960年以前、視覚障害を持った人は一般の教育を受けることができず、受けられたとしても宗教教育に限られていた。

45年前に民間組織により首都のハルツームで盲学校が設立され、毎年100人前後の生徒が在籍している。しかし、遠くからの通学が困難であるため、盲学校に通えるのはハルツームや周辺に住む子供たちだけとなっている。盲学校には寄宿舎が併設されているが、女性用の寄宿舎がないので、女性がほとんど盲学校に入っておらず、男性より教育を受けるチャンスが少ない。また、寄宿舎に入所する子どもたちは親元や地域から離れて暮らすことになるという問題もある。

1980年代に北部のアトバラに盲学校が設立された。そこでは、地域で通常教育を受けている視覚に障害を持った子供たちの自立を目指し、放課後に点字や歩行指導、生活訓練等の指導を行うようになった。2003年には東部のガダルフに盲学校が設立された。ハルツームの盲学校と同じような教育スタイルを採っているが、寄宿舎は設けられていない。南部のジュバにも盲学校があるようではあるが、詳細は不明である。これらの情報からも、盲学校で勉強できる児童生徒がわずかであることが伺える。

盲学校で勉強できる児童生徒数の少なさに加え、教材の不足もスーダンにおける視覚障害者教育の大きな課題の一つである。国内の盲学校には点字印刷機がないため、点字の教科書などが不足している。教育省は毎年年度初めに諸学校に教科書を提供しているが、盲学校はその対象とならない。全ての子どもが平等に勉学に励めるよう、学習環境を保障することは国の勤めである。しかし、今でも教科書一つ提供されることのない盲学校においては、教師が中心となって教材を手作りしている。以前は、隣国のエジプトに点字印刷を依頼していた時期や、ドイツから寄付された印刷機を利用していた時期もあった。残念ながら、政治的にエジプトとの交友関係が失われ、ドイツからの印刷機も故障してしまったため、以前に増して教材の確保が困難な状況に置かれている。

<通常学校における困難>

盲学校には高校がないため、視覚障害者は卒業後、通常学校を経て大学に進み、一般の人と勉強する。ところが、通常学校には点字の教科書を作成できる教員がないので、視覚障害者が勉強するには、同級生や家族の人に本を読んでもらう、あるいは、録音されたテープを聴くかの二つの方法しかない。そのために、途中で勉強をやめる人が少なくない。

通常学校に入学しても、視覚に障害を持つ生徒自身が、どのように通常学校で勉強すべきか理解できていない。通常学校では視覚障害者が勉強できるような環境や受け入れ体制も整っておらず、学校側も生徒に対してどのように対応すべきかわからないでいる。ほとんどの学校や先生たちは視覚障害を持つ生徒に関わった経験がないため、指導方法や接し方などの蓄積がない。

＜新たな枠組みの登場＞

近年は障害者の教育においても、地域の学校で障害児も共に学ぶことを目指すノーマライゼーションや、それぞれの子供たちのスタイルやニーズに合った教育を地域で実現するために、特殊教育、普通教育の枠組みを超えて教育制度全体を改革しようというというインクルージョンといった新しい考え方が取り入れられるようになり、スーダンの教育の在り方も少しずつ変化を遂げつつある。これらの考え方にも反映されているように、障害のある者と障害のない者が、同じ社会に生きる人間としてお互いを正しく理解し、支え合うことがますます重要となる。

2. 大学での教育について

＜大学における困難＞

1997年、ハルツーム大学の視覚障害学生の在籍者数は、約60人に達していた。しかし、大学内での視覚障害者への配慮は不十分であり、教員からの十分な理解や協力も得られていなかった。在籍する視覚障害学生は、次々と授業や試験を受ける上で困難にぶつかった。

困難の改善に向けて、ハルツーム大学で視覚障害者の生徒会を作ることになった。会の目的は、視覚障害者の存在をアピールするとともに、障害に関する理解を深め、視覚障害者の学生が勉強しやすい環境を作ることであった。

視覚障害者の会ができてから二年後、大学での生活もかなり変わってきた。寄宿舎に入居するにしても、各学部におけるサポートが充実した。

＜CAPEDSの関わり～情報処理支援センターの設立＞

2007年には、ハルツーム大学障害を持つ卒業生の会との懇談会を持ち、視覚障害学生の学習環境改善のために、音声で画面を読み上げるソフトを搭載したパソコンと視覚障害学生のための学習支援室が必要だということが判った。ここから本報告書のテーマであるハルツーム大学障害学生支援室設置の取り組みが生まれたのである。のちに詳述するが2008年8月には、CAPEDSとハルツーム大学卒業生の会の協力によって、視覚障害学生の学習支援と情報処理教育を目的としたセンターが設立された。センターの設立は、第三章にて詳述するIbsarプロジェクトの一環である。



(写真左：2007年の懇談会の様子、写真右：情報機器の利用)

現在、パソコンを使用できる視覚障害者はほとんどいない。むしろ、見たことも触ったこともない人が大勢いる。私たち CAPEDS は、そのような視覚障害学生を対象に、パソコンの便利さと必要性を伝えるべく、当大学におけるセンター設立に着手したのである。

将来的には、全国の大学に、情報処理に関するセンターを設立し、視覚障害学生のパソコンのスキルアップ向上をサポートしていくつもりである。一日でも早く、視覚障害者一人一人が情報障害の困難を克服し、社会で、国で、世界中で活躍できる人材になってもらいたい、とメンバー一同心から願っている。

<今後の課題>

大学における視覚障害者教育には教材の提供や学習環境の保障など、未だに多くの課題が残っている。視覚障害学生は、通常授業で使用する教科書もプリントも、そのままの状態では読むことができない。点字図書館もないため、文献や書物を自力で検索し、読むこともできないのである。このような状況では、安心して勉学に励むことができない。

今後は、学校側が学生のニーズに合わせた教材、例えば教科書のテキストデータ化、あるいは点訳、あるいは mp3 などの音声データなどを提供し、学生の学習環境を保障することが重要となる。

私たちはそのような取り組みが一つでも多くの高等教育機関で始められるよう、大学や在籍する障害学生と共に今後も活動していくのである。

【コラム：ハルツーム大学】

ハルツーム大学はアフリカの中で最も古い大学の中の一つで、ハルツーム市の中心に位置している。1902年に設立された同大学はスーダンの教育の中心であり、国内で最も大きな大学であることから、新しく設立された大学へのスタッフ派遣を行うなど、国内で大きな役割を担っている。ハルツーム大学の2008年現在の生徒数は約1万7千人。また、ハルツーム大学は、国際的な活動にも積極的に参加している。国際大学連盟にも加わり、アフリカ大学連合の設立においても中心的な役割を果たした。他大学との連携も数多く行っている。更に、多くの政治家や社会活動に携わる人々を輩出しており、スーダンにおける人材育成へも貢献している。

III. Ibsar プロジェクト

2008年7月から9月にかけて、CAPEDS 代表理事アブディンがスーダンに渡航し、現地の障害学生とともに障害学生支援室の立ち上げプロジェクトを実施した。パソコンの音声読み上げソフト「Ibsar (イブサール)」を大学で学習環境の改善に取り組む団体に提供し、障害学生の学習支援を行う「Ibsar プロジェクト」は、今回の活動を皮切りとして4年間に及ぶ計画である。本章では、プロジェクト全体の目的と計画について紹介する。

Ibsar プロジェクトの目的

- ハルツーム大学へのパソコン音声読み上げソフトの提供
- 他機関へ支援するための障害者支援モデルの確立

活動の内容

- | | |
|---------------|----------------------|
| ✓ 音声読み上げソフト提供 | ✓ ソフトのメンテナンス、指導の人材確保 |
| ✓ 障害者支援室開講 | ✓ 現地活動評価 |
| ✓ モニタリング委員会発足 | ✓ 現地ニーズの把握と対応 |

1. Ibsar プロジェクトの目的

Ibsar プロジェクトは、CAPEDS 活動の四本柱の一つである「情報教育支援」に位置づけられる。パソコンは情報収集や資料作成において、今や高等教育に不可欠なツールであるばかりか、「情報障害」とも呼ばれ情報を得る上で困難に直面する視覚障害者にとって、音声でパソコンを利用できるようになることは大きな変化をもたらすのである。当会最初の活動となる本プロジェクトでは、スーダン最大の大学であるハルツーム大学において視覚障害学生がパソコンを利用できる環境を整えることで、障害学生も献上学生と同様の学習環境を実現するための礎を築くことを目的としている。同時に他高等教育機関での情報教育支援のモデルを提起し、ハルツーム大学に留まらない学習環境の取り組みを促進することも目指している。

プロジェクトの中心となるのは、パソコンの音声読み上げソフト「Ibsar」の提供である。パソコン画面上の文字を読み上げるこのソフトがあれば、視覚障害者であってもパソコンを健常者と同じように使いこなすことができる。日本での資金集めによって本ソフトを購入し、これを搭載したパソコンを現地に設置することがプロジェクトの中心となる。しかし、モノを提供しただけで支援が有効に活かされず無駄になってしまうケースは少な

くない。講習会の実施、モニタリング委員会の設置と運営、現地運営スタッフの育成など、持続性を確保するための多くの活動が本プロジェクトには盛り込まれており、これらを確実にやっていくことがプロジェクトの最も重要な点であると言える。

加えて、CAPEDS の支援の特色に、現地カウンターパートとの緊密な協力が挙げられる。ハルツーム大学の視覚障害卒業生で構成される「卒業生の会」は、以前から大学に対し視覚障害者の学習環境改善のために大学に要求を続けていた団体である。CAPEDS はこの「卒業生の会」と連絡を取り、現地で CAPEDS の活動を支援、実行してもらうカウンターパートとして連携を取っている。

代表理事がハルツーム大の卒業生であるとは言え、日本から遠く離れたスーダンの大学で常時ニーズを把握し対応することは難しい。卒業生の会はこうした地理的な問題を解決してくれ、スーダン人自身での環境改善を進める上での重要なアクターであると言える。

<Ibsar とは>

アラビア語の音声読み上げソフト。

音声読み上げソフトの生産をしている会社は世界でも少なく、アラビア語のものを開発しているのはアラブ系のソフトウェア会社 Sakhr 社のみになる。そのため割高であり、アラビア語圏で購入することは難しい。CAPEDS では当初 Ibsar 五本を購入予定であったが、本年度ディーラーと 5 本のリース契約を行った。(第四章参照)



今回のプロジェクトで設置された
読み上げソフトを利用する学生

2. Ibsar プロジェクトの長期的計画

Ibsar プロジェクトは以下の 5 ステップからなる。音声読み上げソフトの提供に始まり、

現地スタッフの育成、支援状況の評価、ニーズの定期的な把握など、プロジェクト成功のための活動を段階ごとに実施していく。

(参考資料：表1「Ibsar プロジェクト展望」)

第一ステップ 「支援室開講」

最初のステップでは、支援の基盤となる音声読み上げソフトの提供とパソコン室の運営体制の確立が中心的な内容となる。ソフト受け取り手となる卒業生の会には契約書をIbsar 販売会社との間で作成してもらい、ソフトの転売などの不履行がないよう責任を明確化する。

第二ステップ 「ワークショップ開始とモニタリング委員会の発足」

第一ステップに引き続き、使い方などの基礎を説明するための講習会やワークショップを開催する。

また、現地での支援が有効に行われているかを専門で評価するため、「モニタリング委員会」を立ち上げる。卒業生の会のメンバー全員が CAPEDS の支援活動にスタッフとして積極的に協力してくれるわけではなく、支援に正確な評価が不可欠である点から、モニタリング専門の委員会の設置は不可欠である。

第三ステップ 「ソフトの契約更新と指導者育成」

第三ステップはプロジェクト開始1年にあたり、Ibsarの契約更新が必要となる。以前、そして本ステップでの支援室運営状況の評価によっては契約更新の停止も見込みながら、現地での確実な運営を要請する。

同時に、Ibsar指導者の研修も本段階で開始する。Ibsarの購入、契約や利用方法に関し、CAPEDSが行っている作業を現地スタッフも出来るようにすることで、プロジェクト完了後も現地スタッフが自立的に学習環境を維持改善できるようにすることが狙いである。将来的には彼らに他大学での講習を依頼し、CAPEDSからはエジプトやサウジでの指導者向け講習会を受けるための助成金を提供することができることが望ましい。

最低3人のスタッフの確保と、CAPEDSとの運営方針の共有などが具体的な作業となる。

第四ステップ 「再度の契約更新とメンテナンス人材確保」

第四ステップはプロジェクト二年目にあたる。本段階でも運営の評価とソフトの契約更新が必要となる。

これに加え、第四ステップではメンテナンスの人材を確保することが目的となる。CAPEDS支援以前にハルツーム大学にあったパソコンは壊れたまま長年放置されていた。ソフト自体も精密機器に当たり、ソフトが有効活用されるために現地スタッフがメンテナンスも出来るようになっておくことが重要である。

パソコンに詳しい講師による講座を開くことで、現地スタッフのトレーニングを行う。予算を組んで外部団体へのメンテナンスの委託も検討する。

第五ステップ 「ソフトの引渡しとモデルの確立」

最終段階となる本ステップでは、Ibsarの完全な引渡しを行う。これを期にハルツーム大への支援を完了し、他大学のモデルとなる障害学生の学習環境を自立的に改善してける団体とすることを目標とする。これまで実施してきたモニタリング委員会の活動やメンテナンス能力、Ibsarの管理などに対して最終的な評価を行い、プロジェクトを完了する。

上記の流れと並行して、以下の二点を現地で継続的に実施する。

1. 支援、運営体制評価

統一された評価項目に基づき、プロジェクトが適切に実施されているか、現地スタッフは CAPEDS の意向を汲み取って適切に運営を行っているかを評価する。評価結果で現れた問題点は現地の協議の上で解決を図る。今後他大学他機関での支援を実施していく上で参考にしていく。

評価には詳細かつ継続的な調査が必要となり、CAPEDS スタッフの渡航中のみでは十分に行えないため、現地スタッフに対する調査依頼と日本からの定期的な連絡が必要となる。

2. ニーズ調査と対応

プロジェクト開始以前では把握できなかった、またプロジェクト進行によって新たに現れたニーズを把握し、対応する。評価同様ニーズ把握にも現地カウンターパートとの連携が不可欠である。

表1 Ibsar プロジェクト展望

段階	期間	活動内容	結果	意義
第1 ステップ	2008年 8月	ハルツーム大学に Ibsar5 台を寄贈	ハルツーム 大学障害学 生支援室の 始動	障害学生の学 習環境改善の ための枠組み 作り。 CAPEDSのス ーダンでのアピ ール
		Ibsar を使ったパソコン講習会を開催		
		支援室運営の主体決定、 運営体制について合意		
		現在の学習状況、およびニーズを調査		
第2 ステップ	2009年 2月頃	支援室の利用状況、学習環境の改善を評価	支援室の安 定的な運 営、課題の 明確化	障害学生によ る支援室の運 営と学習環境 改善に向けた 動きの開始
		追加でのワークショップ		
		モニタリング委員会始動 更なるニーズ調査		
第3 ステップ	2009年 8月	Ibsar の契約更新	定期的な支 援室運営体 制の開始、 次なるニー ズに対処す るための共	障害学生によ る持続的な運 営体制の確 立、自立的な 問題解決力の 育成
		学習環境および支援室運営の調査		
		Ibsar 指導者の研修		
		支援室運営のための新たなニ		

		ーズへの対応策の検討	通の展望	
第4 ステップ	2010年 8月	使用権の更新	支援室運営 体制の評 価、メンテ ナンスのため の人材確保	運営や備品管 理も含めて、C APEDSに頼ら なくてもできる 状況を作る
		メンテナンスのできる人材を育成		
		学習環境と運営状況の調査		
		新たなニーズへの対応		
第5 ステップ	2011年 8月	lbsar 引き渡し	学習環境の 改善と持続 的な改善へ の道筋	ハルツーム大 をスーダン障 害者の高等教 育支援のモデ ルとし、他機関 への普及の足 掛かりとする。

IV. Ibsar プロジェクトの現地報告

2008年8月1日から2008年9月14日までの期間において、CAPEDS 代表理事モハメド・オマル・アブディンがスーダン・ハルツーム州において Ibsar プロジェクトを行った。

【プロジェクトの目的】

- (1)ハルツーム大学における視覚障害者向けのパソコン室の立ち上げ
- (2)初の講習会の開講とその評価

【プロジェクトの流れ】

☆ 事前調査

渡航前の事前調査
現地到着後の調査

☆ 現地での活動

- 1.卒業生の会とのミーティング
- 2.パソコン本体の購入に必要な資金の調達
- 3.Ibsar のディーラーとの契約
- 4.オープニングセレモニー
- 5.トレーナー向けの講習会の開講

☆ 事後調査

☆ 成果

- * 支援室への Ibsar 導入
- * トレーナー養成のための講習会の開催

☆ 課題

- * 今後のプロジェクトにむけた資金調達
- * 現地との連絡方法の確立

1. プロジェクト全体からみた今回の活動の位置づけ

CAPEDS の取り組みのひとつである「情報教育支援」として、昨年からハルツーム大学内に卒業生と在学生在が利用できるパソコン室を立ち上げるプロジェクトを企画してきた。第三章でも触れられているが、本プロジェクトは CAPEDS とハルツーム大学障害学生卒業生の会が協力して行うものである。

具体的には、CAPEDS 側がアラビア語の音声読み上げソフトの提供を行い、卒業生の会がパソコン本体の準備と運営を行う。去る 3 月に卒業生の会と合意ができ、実施に向けて準備を進めてきたところである。

本プロジェクトは 5 つのフェーズからなっており、今回の活動内容はそのうちの第一ステップにあたるものである。

なお、本プロジェクト全体は 2011 年完了をめどに進めている。第一ステップでは、ハルツーム大学のパソコン室にアラビア語音声読み上げソフト(Ibsar)を搭載した 5 台のパソコンを設置し受益者に提供すること、さらに、CAPEDS 代表のモハメド・オマル・アブディンが現地に滞在している間、初の Ibsar 使用に関する講習会を行い、その評価をすることが目標である。

2. 事前調査

去る 2008 年 3 月より、CAPEDS 内でプロジェクト実施に踏み切るための事前調査を行ってきた。2008 年 7 月に理事会において、正式にプロジェクトを実施することが決定したが、代表のアブディンがスーダンに出向き、パートナーである卒業生の会側がどこまで準備を進めてきているのかを見て判断することになった。

<渡航前の事前調査>

代表のアブディンが現地に出向く前から、卒業生の会と連絡を取り合ってきた。事前の電話と E メールでの連絡により、以下のことが確認できた。

- ①パソコン室が大学側から卒業生の会の側へ引き渡された。
- ②引き渡された部屋が使用できる状況になく、補修工事が必要である。
- ③補修工事の費用が卒業生の会の予算とメンバーの寄付によって賄われた。
- ④大学側から約束された 6 台のパソコンがまだ引き渡されていないものの、近いうちに手に入るとの約束を大学長室から頂いている。

<現地到着後の調査>

現地到着後以下のことを確認した。

- ①パソコン室が補修工事の後、使用できる状況になった。
- ②卒業生の会のメンバー一同、本プロジェクトに大きな期待を寄せている。
- ③パソコンがまだ大学側から引き渡されていないので 1 週間ほど様子を見ることになった。

3. 活動内容

今回の渡航において行った活動を挙げると、下の5つが挙げられる。

1. 卒業生の会とのミーティング
2. パソコン本体の購入に必要な資金の調達
3. Ibsar のディーラーとの契約
4. オープニングセレモニー
5. トレーナー向けの講習会の開講

<1. 卒業生の会とのミーティング>

期日：8月6日(水)17時～19時

場所：ハルツーム大学 Adequate Affairs Administration の会議室

目的：支援室開設前の準備の状況の共有

このミーティングで以下のことが判明した。

- ① 卒業生の会が大学側からもらうことになっていた6台のパソコンがまだ引き渡されていなかった。理由として、大学側が現在財政難に苦しんでいるため、パソコンの引渡しを延期せざるを得ないことが上げられた。解決案として、卒業生の会会長のナウラーニー氏と CAPEDS 代表のアブディンの二人が複数の企業と交渉し、パソコンの購入に必要な料金を調達する案が上げられ、CAPEDS 側もそれを承諾した。
- ② パソコン室として割り当てられた部屋がすぐに利用できる状況になく、補修工事が必要であった。それが卒業生の会側が負担して、工事を行った。
- ③ 卒業生の会がパソコン室の係員の給与とインターネット料金を捻出することが困難である。

解決案として、受講者から負担にならない程度の受講料をとることがあげられた。

CAPEDS 側として、受講料を払えない受益者への配慮をすることを条件にこの案に承諾した。

<2. パソコン本体の購入に必要な資金の調達>

ミーティング後、ナウラーニー氏と打ち合わせを重ね、いくつかの企業を選定して、企業回りをはじめた。

その結果8月20日に組み立てのパソコン3台の購入資金150000円が集まった。残りの2台のパソコンは、組み立てを依頼した知人がボランティアとして無償で組み立ててくれた。結果としてパソコン5台を確保することができた。

<3.Ibsar のディーラーとの契約>

パソコンが手に入ったことで、卒業生の会の代表のナウラーニー氏とともに、去る 8 月 21 日(木)に発注依頼をし、オープニングセレモニーの日を 1 週間後の 8 月 28 日とした。

①契約形式

今回は 5 本の Ibsar(アラビア語音声読み上げソフト)のリース契約を卒業生の会とディーラーである「Soft Act」という会社との間で結んだ。支払いは 1 本につき \$500 とし 4 年連続でソフトのリース契約を更新すると、所有権が卒業生の会に引き渡されるというものである。これには、4 年の間バージョンアップを無料で受けられるという特典もある。

②支払いについて

ソフトのリース代の負担は CAPEDS 側が行うことになっているが、卒業生の会が CAPEDS 側と合意した内容に重大な違反をしないことがその条件となっている。リース代金の支払いは CAPEDS が負担ということになっているが、契約はあくまで、卒業生の会とディーラーとの間で結ばれているので、ソフトの管理を含めて、CAPEDS との間で確認された健全な支援室の運営に違反があった場合、CAPEDS は支払いを凍結するという対応をとることになる。



卒業生の会とのミーティング



ミーティング後、メンバーと

<4.オープニングセレモニー>

8 月 21 日のソフトの発注後に、オープニングセレモニーの準備にとりかかった。招待状を作成（卒業生の会がアラビア語、CAPEDS 側が英語のもの）し、配布作業を開始した。結果として、約 80 枚の招待状を配布した。

①対象組織と人物

オープニングセレモニーのコンセプトとして、マスコミに本プロジェクトをアピールし、企業や、教育と関連する団体もアピールのターゲットとした。

②出席者

28日のオープニングセレモニーは、100名を収容できる中会議室に出席者が入りきれないほどの大成功であった。特に、ハルツーム大学旧大学長のマリック先生、ユネスコ職員、日本大使館の外交官、JICAの調整員、ハルツーム大学中央図書館官庁、三つの他の大学の障害学生組織の代表、多数のNGO関係者、二つのラジオ局と新聞社1社、そして本プロジェクトの受益者となる学生や卒業生が出席した。

③内容

オープニングセレモニーでは、卒業生の会のナウラーニー氏に続き、CAPEDS代表が挨拶した。ハルツーム大学障害学生係の後に中央図書館館長が続いた。その後、スーダン人で、IBSARのトレーナーであり、IBSARの開発にも携わったヒシャム・ホッメーダ先生がIBSARについて熱く語った。最後にマリック旧学長がセレモニーを締めくくった。

④体験コーナー

オープニングセレモニーの後、出席者がパソコン室に移動し、マリック旧学長がテープを切った後、出席者がIBSARを実際に体験した。多くの出席者が、自分の名前をIBSAR利用者の学生二人に書いてもらおうと、パソコンに入力された自分の名前を読み上げる、この新しい読み上げソフトに感動する声が、狭いパソコン室になりやまなかった。

⑤レセプション

体験コーナーの終了後、出席者の一部が中会議室に戻り、宴が始まった。車椅子の歌手のムバラック・ジャーベリさんがウッド(中東に広く用いられるギターに似た楽器)のきれいな音色を鳴らしながら美しい歌声を場内に響かせてくれた。



オープニングセレモニーに集まった多くの方々



車椅子歌手のムバラック・ジャーベリさん

<5. トレーナー向けの講習会の開講>

当初今回のステップ

講習会の実施と評価を計画していた。しかし、幸運なことに IBSAR のトレーナーの第一人者であるヒシャム・ホッメーダ先生が、勤務先のサウジから一時帰国しているという朗報を受け取った。そこで急遽協力を依頼し、トレーナー養成を目的とした講習会開催に変更、開催を決定した。

①実施期間

2008年9月7日から20日まで

②目的

IBSAR トレーナーの育成

③受講者

今回約6名の受講生が参加した。受講生の所属は以下のとおり

ムハンマド・サイイド：男性、卒業生の会(Ibsar プロジェクトの責任者)、全盲(個人のパソコンと Ibsar で参加)。

アムル・アルダリール：男性、卒業生の会、全盲

サーディグ・ビヘーリ：男性、外部

ライラ・アハナロ：女性、ハルツーム大学理数学部助手

ハーメド・バシール：男性、ハルツーム大学付属研究所の IT CENTER 職員

ファーティマ・イブラヒム：女性、大学の事務員

ウラー：女性、卒業生の会(肢体不自由)

④実施状況

筆者(モハメド・アブディン)がスーダンを離れる前にインターネット研修を除くすべての講義が行われた。ただし、パソコン室にはまだインターネット接続ができていないので、現在その卒業生の会が受講生の一人であるハーミド氏の職場のパソコンに音声読み上げソフトをインストールして、インターネットに関する講義を行うことを検討している。

4. 事後調査

当初の計画案として、プロジェクト開始後、受益者むけの講習会の様子を見学し、評価することになっていた。しかし、前節にも述べたように、初の講習会は受益者向けではなく、トレーナー養成を目的とした講習会に変更した。スーダン人で Ibsar のトレーナーの第一人者であるヒシャム・ホッメーダ氏がたまたま赴任先のサウジから一時帰国していたため、この貴重な機会に、トレーナーになる人を募集し、トレーナー育成を目指したのである。

前節にも述べたが、約6名の受講者が講習会に参加した。残念ながら、講習会が終了す

る前に筆者が日本に帰ることになってしまったため、筆者が現場での講習会を視察した際の感想をこの場での評価とする。

今回の受講者の6人のうち、2人が全盲であり、残りは晴眼者である。受講者の大半がハルツーム大学の助手、職員、あるいは大学院に通う卒業生であることから、パソコン室へのアクセスが容易である。

指導に際して、「晴眼の先生が指導すると、同時に生徒がどういう動作をしているかをチェックできる。さらに、受益者がヘッドフォンしたままでも教えられる。全盲の場合は同時に5人に対して指導することが難しい。一方では、1対1の場合は、全盲が指導したほうがよい」とインストラクターのホッメーダ氏が語っている。そうした意味では、今回は晴眼者と全盲の両方が、トレーナー向け講習会を受講していたためバランスがよかったと考えられる。

受講生の一人は理数学部の助手であり、パソコンのメンテナンスもさることながら、理数学部内でも宣伝していただけるとの約束をいただいた。

5. 今回のプロジェクト総括

今回の渡航では予定していた第一ステップの全行程が完了し、トレーナーの養成にも着手することができた。現地での連絡方法や資金面での課題は山積しており、課題に関する詳細は第六章で述べるが、渡航活動全体の成果としては充実した渡航だったのではないかと考えられる。

V. 会計報告

平成 19 年度 スーダン現地事業会計収支計算書

(単位：円、米ドル換算レート：\$1=110.98 円)

科目	実績	備考
I 収入の部		
1 入会金収入		
入会金	15,000	¥1,000×15 名
2 会費収入		
正会員	60,000	¥5,000×12 名
学生会員	4,000	¥2,000×2 名
賛助会員	30,000	¥30,000×1 名
3 事業収入		
事業収入	13,420	
4 寄付金等収入		
寄付金収入	77,925	
5 その他資金収入		
その他	17	
当期収入合計 (A)	200,362	
前期繰越収支差額	288,152	
収入合計 (B)	488,514	
II 支出の部		
1 事業費		
点字版寄付事業	0	
サッカーボール寄付事業	0	
イベント準備費	11,472	
スーダン活動費用		
デジタルカメラ	16,050	現地記録用
電池	0	
メモリー	980	
カメラケース	1,270	
IBSAR リース費用	277,450	\$ 500×5 本
雑費・交通費	21,522	
イベント費用	11,098	オープン記念
2 その他支出		
その他	59,266	

当期支出合計 (C)	399,108	
当期収支差額 (A) - (C)	▲ 198,746	
次期繰り越し収支差額 (B) - (C)	89,406	

VI. 今後の課題

本章では、今夏のプロジェクトの反省と今後の活動に向けた課題を挙げる。今回多くの方々に参加していただき成功に終わったプロジェクト第一段階ではあるが、未だに問題は山積しており、早急に対策を取ることが必要になる。以下に挙げた課題から CAPEDS の今後の活動の方向性を共有して頂ければ幸いである。

1. 事務面での課題

事務面での最大の課題は、現地との連絡の取りづらさにあったと言える。プロジェクト立案時には日本からスーダンと連絡を取り合うことで現地ニーズを把握し、適切な支援を企画することが必要であった。しかし現地で連絡をしてくれる人がネット環境が整っていない、連絡が遅れるなどの理由からスムーズに現地とコンタクトを取ることが非常に困難であった。結果、大学がパソコン提供をいつしてくれるのか分からない、卒業生の会がどの程度プロジェクトに関わってくれるのか分からないなど多くの情報を得ることが遅くなってしまった。

今後の課題として、定期的な連絡体制を確立する、連絡がある程度遅れてしまった場合も想定して対応策を事前に練っておく、などの対策をする必要があると言える。

2. 組織面での課題

1. 資金確保戦略における経験値不足

A. 元手となる資金の不足

支援の中核である第一歩となる物資（Ibsar など）を購入するだけの資金が足りない。どのような団体でも最初は直面する問題だと思うが、最初に物資ありきの CAPEDS の活動にとっては、大きな障壁だった。

B. 資金確保の経験の不足

そこで自分たちで資金獲得手段を勉強し、手探りながらも行動を始めた。しかし、資金を集めようにも、実績がないために十分な支援が得られなかった。

企業への助成金申請を試み、企画書を作成、送付し面接をお願いしたが、殆どの企業で面接を断られ、会って頂いたとしても予算確定期が過ぎている、企業の求める活動と CAPEDS の活動が噛み合わないなど、助成金を頂くのは極めて困難であった。

会員費獲得のために社会人の方に会員になって頂こうとしたが、イベントなど社会人の方にお会いできる機会の情報が不足しており、必要な経費をこの手段で集めるのも難しい。（それでも会員増加による広報という面では大きな成果を得られた）

結局朝日新聞の天声人語に紹介されたことを契機に頂いた寄付金と、会員を募集して頂いた会員費を中心に第一ステップの資金を捻出したが、当初予定していた Ibsar の購入（16

万円。本を読み取るためのスキャナ機能がつくと約 30 万円)ではなく一年毎のリース (5 万円/一台。4年継続でリースすると購入となる)となったのは想定外であった。

以上の課題を克服するため、今後は他の NPO の方から資金獲得戦略についてアドバイスを頂き、適切な戦略の立案を進めたい。同時に、募金やチャリティーイベント開催など様々な手段を考案し、次回の現地プロジェクトまでに必要な資金を獲得したい。

2. プロジェクト立案の経験値不足

現地で何が求められており、そのうち CAPEDS という日本に拠点を置く NPO 法人ができることは何なのか、という活動の土台がまだ明確になっておらず、何をプロジェクトの目標に設定すればいいのかに関しスタッフ同士で多くの議論を重ねた。特にプロジェクトの最終目標を「就労支援」という高等教育から確実に結びつく保証のないものに設定するかに関しては意見が分かれた。結局就労に必要な条件を整えるという意味で「就労促進」とした。今後現地の成果やニーズを受けて調整していく必要があるかもしれない。

3. 現地との連絡の不明確さ

支援活動をする上で、支援対象の状況とニーズの把握は不可欠である。しかし日本からスーダンという地理的な問題からこうした基礎的な情報が十分でなかった。また、現地カウンターパートが不明確であることも的確な情報を得、時には収集してもらうためには障壁となった。

特に事前調査が不十分なまま現地へ渡航することになり、事前事後調査比較ができなかったことはプロジェクト評価の上で大きな問題である。

今後はカウンターパートに対する継続的な活動協力の要請と定期的な連絡機会の設置によって、出来る限り地理的な問題を緩和していきたい。また、カウンターパートに仕事をしてもらうためには給料や謝礼金などがどうしても必要になってくる。こうした資金ニーズに対して団体として出来る限り対応していきたい。

3. 下澤嶽様・坂田喜子様からのメッセージ

今回は、NPO 法人 スーダン障害者教育支援の会(CAPEDS)の皆さん、「2008年度 Ibsar プロジェクト活動報告書」の作成と発行、ご苦労さまでした。スーダンにおける障害者支援の様子がつつられており、活動の成果やその深さを報告書から実感することができます。

日本の NGO は 1980 年代に急成長を遂げました。しかし、現在でも 9 割近い NGO が、活動をアジア地域に集中させています。アフリカ地域の貧困や社会問題を考えると、日本の NGO のアフリカ地域へのより強いコミットメントが現在求められています。

スーダン障害者教育支援の会の活動は、アフリカという地域にかかわる貴重な日本の NGO であることにとどまらず、社会的に弱い立場に置かれる障害者を対象としており、2 重の意味で「コアな貧困層」にチャレンジされていると思います。これからも皆さんの活動の発展を祈願します。

(特活) 国際協力 NGO センター 事務局長 下澤嶽

Ibsar プロジェクトに関して、始まりから 2011 年の完了まで 5 段階のプロセスがきちんと説明されている。

これを予定通り遂行するには、現地のカウンターパートがいかに信頼がおける個人・団体かにかかっている。

これに並行して、情報処理教育センターを設立し、パソコン技術の向上にも力を入れていることが分かった。然し、日本人とスーダン人の置かれている社会状況やメンタリティーが異なるために、日本側の計画通りに行くとは限らないので、将来、時間面、人間関係面などにおいて、試行錯誤が続くことを覚悟する必要があると思う。

資金面での働きかけもされているが、公的な助成金は活動歴が 2 年以上で申請できるので、地道に活動を続けることが望ましい。その場合、現地でのプロジェクト立ち上げ前の調査期間も考慮されるので記録しておくとうい。

本報告書は、なぜ、このような活動を始め、なぜ必要なのか、そのための目的、遂行段階が分かり易く書かれている点が評価できる。次は活動を開始してから、どんな問題が発生し、どのように解決したかということが具体的にわかると面白いと思う。

CAPEDS 会員 坂田喜子

4. 総括

昨年（2007年）のこのごろを振り返ると、本会はまだ立ち上げから半年しか経っていませんでした。そのころ、数少ないメンバーで、団体のNPO申請手続きで書類と睨めっこ状態でした。組織を整えることがどれほど大変か、素人の私を含む当時のコアメンバーの誰もが思ったことでしょう。しかし、その組織作りができたからこそ、CAPEDSの今があるのではないかと思います。

Ibsar プロジェクトに関しては、昨年の暮れから考え始めていましたが、本当に出来るのかというのが正直な所でした。カウンターパートがしっかりやってくれるのか？CAPEDSでプロジェクトに必要な資金調達ができるのか？運営はうまくいくのか？などなど不安な材料が揃っていたのです。

しかし、3月につくばでCAPEDS合宿を行った時、参加メンバーにプロジェクトの必要性について話したところ、非常に前向きな反応を頂きました。それを励みに、卒業生の会と具体的な話を進めて、計画案を立てることになりました。

計画案当初から、不安な様子があり、それをできるだけ少なくするように努めて参りました。特に、最も不安だったのが、スーダン現地で、日本の感覚で想定できないような事態が発生することでした。スーダン出身の私が、それをよく理解していて、計画案当初、私はできるだけフレキシブルなものを作るように努めてまいりましたが、沢山の方々に「それが甘いよ」との指摘を受けました。

2008年7月、現地へ出発する直前に、理事会を開き、不安を含めた最終的な計画を正直に説明させて頂きました。結果から言えば、私は現地に向かえることになり、状況を見てからプロジェクトの実施を行えるかどうかの判断を委ねられました。重い責任でした。

現地についてから、衝撃的な事実が判明しました。大学が、約束していた6台のパソコンをまだ引き渡していなかったのです。それどころか、近いうち引き渡される可能性すら有りませんでした。

それは、CAPEDS側がプロジェクトを打ち切るのに十分な状況でありました。しかし、カウンターパートである卒業生の会のやる気、そしてパソコンのことを私に打ち明けたときの申し訳なさや落胆ぶりをみて、やっぱりここで相手と信頼関係を築き上げた方が、この危機をチャンスに変え、今後長い目で見た時にCAPEDSにとって頼もしいカウンターパートを作ることが出来るのではないかと思います。プロジェクト実施続投を私個人の判断でさせて頂きました。これは果たして、間違いだったのでしょうか？正しい判断だったのでしょうか？この答えを出すにはまだ時間が必要だと思います。ただ一つ言えるのが、現時点において、ハルツーム大学の一角には、アラビア語音声読み上げソフトを搭載したパソコン5台があって、それには毎日6人のトレーナー候補が毎日2時間ばかり音声読み上げソフトの仕組みを学び、ラマダン明けに、いよいよそれを待ちに待った視覚障害学生や卒業生がパソコンの勉強をし始め、これまでに自分たちの力で行きつけなかった情報の世界へ

アクセスできるようになるだろうと言うことです。文字を自分で書いたり、レポートを作成したり、新聞を読んだり、ネットに溢れる情報に自由にアクセスできるようになるでしょう。

7年前に、私自身が初めてパソコンを使えるようになったときの感動と開放感をいつになっても忘れることができません。そして、そこから得た自信もまぎれもなく本会の活動を始めるきっかけになったことでしょう。

パソコン室はもう出来上がりました。ただ、課題はまだ山積みです。運営には安定的な資金と高いマネジメント能力が必要となります。卒業生の会とともに、一つ一つの課題をクリアーしていきたいとおもいます。ここまで支えてくれた会員の皆様、寸暇を惜しんで一生懸命がんばってくれた事務局スタッフのみなさん、建設的な意見とアドバイスをくださった理事の皆様、そして励ましの言葉をいただいた多数の友人に感謝の意を表したいとおもいます。今後とも、ご指導ご支援をよろしくお願い申し上げます。

スーダン障害者教育支援の会 CAPEDS 代表理事

モハメド・オマル・アブディン